

第6回アジアドラマカンファレンス・報告書

2011年6月9、10日、アジアの放送作家・制作者たちが集う「アジアドラマカンファレンス」がソウルで開催された。参加は日本・韓国・北京・上海・台湾・タイ・シンガポールの6つの地域で、マスコミ関係者を含め、参加者は70名以上。「アジアは一つ (Asia is One!)」を合言葉に、参加各国のドラマを観て、比較し討論し率直に語り合い、友好を深めると共に、将来的に提携・協力していくことの可能性をさぐった。

今回のカンファレンスの特徴は制作者の発表の場が設けられたことだ。カンファレンスの名称も「アジアドラマ作家カンファレンス」から「作家」の文字が消え、「アジアドラマカンファレンス」に変更された。ドラマを共同、ないし協力・提携して制作する方向に一步踏み出したということである。

一日目は作家が、二日目は制作者であるプロデューサーが、それぞれ関わった自作ドラマについて、その狙いや発想、反響等を具体例をあげて熱く語った。

カンファレンスの冒頭、主催者である韓国の「文化産業交流財団」(KOFICE)の前会長シン・ヒョンテク氏が2011年初頭に亡くなった事に対して、参加者全員が黙祷した。シン前会長は日本放送作家協会の市川森一会長と共に、当初より同カンファレンスを支えてきた最大の功労者であり、日本の作家7名による韓国との合作ドラマ

「テレシネマ」を作り出すなど大きな功績を残された。前夜祭で流されたシン会長の追悼映像には、参加者の中園ミホ氏をはじめ、思わず涙する作家も多かった。財団の

会長でありながら、各国の作家一人一人に気さくに声をかけるシン会長の気さくな姿が思いだされる。今回のカンファレンスは、シン会長の遺志をつぎアジアのドラマを一層盛り上げていくため「アジアドラマのハイブリット化」をテーマとした。アジア各国の作家や制作者が独自性を保持しつつ、異なった文化を組み合わせることで、さらに豊かで面白いアジアならではのドラマを創り出し、世界市場に通じるものにしていこうということである。ハリウッドに負けないアジアのドラマを新たに創り、世界に発信していこうということを改めて確認できたのではないか。



ドラマに貢献する制作者に贈呈された牌。
脚本家・中園ミホ氏、NTVプロデューサー次屋尚氏が受賞

一日目 各国作家の発表について

■北京作品：『クィーンズ～長安、後宮の乱～』ワン・イ作

中国の前漢時代の実在した女性を描いた歴史大作。19歳で王座に入り、前漢の繁栄と衰退を見て

きた人物の人生を元に描いた作品のダイジェスト版。その背景には、皇帝の子どもを生むための苦
労や、宮廷内での女性たちの闘いが描かれている。作者のワン・イさんは、30代の美女。

「中国では男性作家が多いが、視聴者は女性がほとんどなので、女性の目線を入れ、女性の気持ち
を描きたかった。女性が無視されて（さげすまれて）来たという時代背景を描いた」と語った。

印象的なシーンに、主人公の女帝が城から解放され自由に生きていくという場面があった。靴を
残して去っていく場面はフィクションだというが、女性ならではの視点が感じられた。

■上海作品：『我的美○人生』ワン・リピン

長年家政婦として生きてきた年配女性と息子、
そして息子の女友達の日常を題材に、現代の上海
の様子を描いたもの。姑と嫁がはじめは対立し、
やがて共に夢を見つけるというストーリー。作者
の実体験として、自分の家にいた家政婦を参考
にしたという。ブログにて家政婦体験のある視聴
者の意見を求めるなど、積極的に視聴者と意見交
換をするという作者の手法は興味深く、パネリス
トからも質問が出ていた。



ワンさんは、カンファレンスの1回目から発表を続ける常連。毎年ドラマを一作ずつ放映してい
るという。来年もここで発表しますと、その意気込みを語った。

■台湾作品：『ブラック&ホワイト』チェン・フエイル

硬派と軟派という対称的な刑事を主役にしたアクションドラマ。映画化もされた大ヒット作。作
者は「社会の不正をアクションドラマを通して世に伝える作品」と語ったが、内容は社会派という
より、エンタテインメント性の強いものに思えた。本作がデビュー作という作者・チェンさんもまた、
活発で美しい女性だった。

■日本作品：『ハケンの品格』中園ミホ

篠原涼子主演で07年にOLを中心に女性たちに支持され、今でも語
り継がれている作品。韓国など各国で放送され、国外での評判も
高い。

中園さんは、ハケンという厳しい雇用の現状や本音を、社会派ド
ラマではなく、コメディとして描いている。「会社でつらい思い
をしても頑張っている彼女たち（ハケンさん）が、家に帰って、
笑って元気になるドラマにしたかった」と語った。



■韓国作品：『製パン王キム・タック』カン・ウンギョン

スターではない無名の俳優を抜擢し、題材もパン職人の半生を描いた作品。韓国では最高50%以上という驚異的な視聴率をあげた。

作家のカンさんは「ホテリアー」などでも知られるヒットメーカー。今回の作品では「一人一人の登場人物を丁寧に描いて、男の生きざまを表現したかった」と語ったのが印象的だった。

今回のカンファレンスで驚いたのは、発表者として登壇した作家がすべて女性だったことだ。韓国の放送作家協会の8割が女性だというコメントもあったが、女性の脚本家たち元気で生きいきしていることに驚かされた。

二日目 各国制作者の発表について

各国・地域プロデューサーによる自作のダイジェスト版や、合作・リメイクなどの動向などが発表され、活発な討論が交わされた。各国の代表はいずれもドラマを明確に「ドラマ産業」と位置づけ、作品をどう海外に売っていくか、そのためにはどのような内容、切り口が必要か等々ボーダレス化の現実を見据え建設的意見を出した。日本からは日本テレビの次屋プロデューサーが発言者として演壇にたち、中園ミオ脚本の『ハケンの品格』などの制作の意図や反響などについて具体的に語るとともに、アジアの他の国々との提携・協力の可能性についても触れた。

今年3月の東日本大震災については、登壇した各国の皆さんからお悔やみの言葉を頂いたが、これに対して、『アジア・イズ・ワン』という横断幕の前で、次屋プロデューサーが深々と頭をさげてお礼をした。一瞬会場が静まり、あの震災が海外にも大きな衝撃を与えたものであったことを改めて実感すると共に、「アジアはひとつ」という思いを新たにした。



プロデューサー会議のなかで発言者が一様に口にしたことは、「良いドラマは良い脚本から生まれる」である。ドラマ制作の「鉄則」が改めて確認されたことは、日本放送作家協会としては嬉しいことである。

今後、アジアドラマカンファレンスは、参加国による「合作」を目指して動き出すことになる

が、合作の最大の目的は「ドラマ・マーケットの拡大」であることも指摘された。韓国に例をとると、国内マーケットは約五千万人弱だが、日本と合作をすれば、日本の人口を入れた約一億七千万を対象としたマーケットになる。ボーダレス化が進むなか、日本も韓国、中国、さらに東南アジアなどのマーケットを視野にいれた作品作りに踏み出す必要がある。

そのためには、異なる文化を背負った関係者同士の交流が大事である。「合作」と口で言うのは簡単だが、文化の違いもあって実現にはさまざまな壁がある。ただ、壁があるからといって現状維持にとどまっていたら、ドラマの明日はない。「国際間の提携・協力」といった新しい経験の積み重ねのなかにこそ発展の鍵があるということ、参加者の多くは実感したはずである。

制作協力や合作は、ビジネスの面ばかりでなく、異なった文化をもつアジアの国同士の理解と友好にも大きく貢献するものであり、今後とも引き続き、協力と提携を深めていこうということで、カンファレンスは成功裏に幕を閉じた。

次回の「アジアドラマカンファレンス」は福岡で開催される。

このカンファレンスから、アジア発のユニークなドラマが続々誕生することを期待したい。

(ドラマカンファレンス参加者：板倉真琴・香取俊介・石橋映里)